



加茂小学校校報第〔14〕号

嬪 村尾 隆晃

1 学期最終号

☐もだいすき

☐りもりげんき

☐びのびやさしい

☐つこつまなぶ

令和4年7月19日

加茂っ子



子どもに遺^{のこ}してやれること

子どもたちを観ていると、家庭の様子がよくわかります。「子どもは、親の姿を映し出す鏡だ。」などによく言われますが、それを実感することがしばしばあります。

今まで35年程の教職生活の中で、おそらくは何千人という子どもたちと出会ってきたと思います。その子どもたちの中には「家の娘や息子もこんな風に育ってくれたらなあ。」とつくづく思うような聡明で、優しく、どんなことにも前向きに取り組むことができる子ども、まわりの友だちを幸せにし、支え合い、高め合っていく輪の真ん中にいつもいる子どももいました。(先日の修学旅行でわかりました。加茂小学校の6年生の中にもいました)

そんな子どもには、必ずと言ってよいほどの共通点があることにも気がつきました。それは、決して他人の悪口や陰口を言わないという点です。

このことは、おそらくは、先天的な資質ではなく、幼少期からの家庭生活の中で後天的に身についたもの、言い換えれば、その子に接する親の姿勢を映し出したものであると私は考えています。

恥ずかしながら既に成人している我が子3人を育てるにあたって、私には何ら自慢できるようなことはありませんでしたが、ひとつだけ妻と話し合い心がけてきたことがありました。

それは、子どもたちの前で、学校の先生や友だちをはじめ他人の悪口や陰口や批判を言わないこと、決して後ろ向きな愚痴や言い訳を言わないことです。逆に、学校の先生方、地域の方をほめることを心がけてきたつもりです。学校の先生をほめると子どもは、学校と親が同じ方を向いて自分に接してくれていることを感じとり、精神的に安定し、他人に優しく、物事に前向きに取り組んでいくようになると思ったからです。

ごく当たり前の順序で逝く限り、子どもは親亡き後、一人で生きていかなければなりません。親亡き後、どんな苦勞にぶつかるかわかりません。子どもは何人にも予想がつかない未来を生きていきます。そんな未来を生きていく子どもに、親として遺^{のこ}してやれることは、多額の財産ではなく、テストで高得点をとる学力でもないと思います。本当に大切なものは、物事の本質を見極め、納得のいかない理不尽には物申すことのできるたくましさ、違いを認め、人を思いやり、支え合い高め合って生きていける懐^{ふところ}の深さ、愚痴や言い訳を言わず前向きに物事に取り組んでいくしなやかさではないでしょうか。

私の夏休みの思い出



明後日から子どもたちが心待ちにしている夏休みが始まります。今から半世紀も昔、私が小学生の頃の夏休みの思い出をお話したいと思います。(決して子どもたちの参考になるような話ではありません)

ません)

当時は、エアコン等という物はどこにもなく、地下水で冷やす水冷式クーラーが散髪屋さんや美容室、スーパーなどにあるくらいでした。およそ40日の夏休みを毎日ランニングシャツと短パンで汗まみれ・泥まみれになって過ごしていました。

朝6時半になると今は亡き祖母に起こされ、眠い目をこすりながらラジオ体操に出かけ、半分眠りながら体操をし、第一体操と第二体操の間は、その場にしゃがみ込んでうつらうつら。ラジオ体操カードに分団長さんのハンコを押してもらおうと、一目散に家に帰り二番眠です。

8時頃に起き出すと「朝の涼しいうちに学習しよう」との『木次小生活の約束』もどこ吹く風、家の近くの空き地に出かけて友だちと野球。午後は当時監視当番の保護者がついて遊泳可能であった斐伊川の熊がい淵（47年前に合宿中に木次中学生の死亡事故があってからは遊泳禁止）に水中めがねとヤス（鋸）を手に行くか、または、木次町営プールに行き、遊泳スタートから終了まで水泳と水遊び三昧。プールの帰りにはスーパーまんやでアイスを買って食べ、帰ると夕飯までほっぺたにタタミの後をつけてお昼寝タイム。すると水泳で耳に入った水が温かくなってジワッと出てきます。そのなんとも気持ちのよいこと。

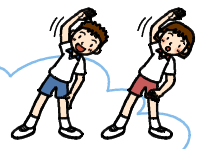
当時は『夏休みの友』という40ページの学習教材があり、夏休みの風物詩的な存在でした。毎日1ページずつ計画的に済ませていけば、夏休みが終わる頃には全ページ終了できるようになっているのですが、なぜか出校日（当時は、8月11日が出校日でした）を過ぎ、お盆の3ヶ日も終わり、心に秋風が吹くようになってからあわてて1日に複数ページがんびりはじめるというおきまりのパターンをこりもせず毎年繰り返していました。…加茂小のみんなはそんなことはないと思いますが…

それでも小学生の時の夏休みは格別でした。ムツとするような草いきれ、オガクスだらけになりながら製材所でカブトムシを百匹も捕まえたこと、土曜日の夜は土曜夜市で木次の町はにぎやかだったこと、お盆のお墓参り・盆踊り、8月6日の夕方には各自治会の子ども会で笹竹に七夕飾りをし、ごちそうを食べ、木次小の校庭で七夕の集いをし、翌朝斐伊川の潜水橋「願い橋」から役目を終えた笹飾りを流していました。5年生の夏休みには、映画『砂の器』のロケで近所の天野旅館で宿泊していらした今は亡き丹波哲郎さんと緒形拳さんに握手をしてもらったことなどなど、まるで昨日のこのように鮮明に思い出すことができます。

さて、今年度の夏休みは36日あります。6年生にとっては小学校生活最後の夏休みとなります。どうかよい思い出をいっぱいつくって締めくくってほしいと思います。

長い夏休み次の五つを大切にしてお過ごしてほしいと願っています。

- ☆ 『いのち・健康』
- ☆ 『家族』
- ☆ 『感謝の気持ち』
- ☆ 『あいさつ』
- ☆ 『夏休みにしかできない体験・経験』



夏休み

いっぱい「ありがとう」が言える毎日に…